東京療養所東講堂にて

最初の殉教者ステパノ

――使徒行伝第６～７章――

１９５７年９月22日
小池辰雄

キリストの見えざる手の按手　ステパノの大演説　旅の神・約束の神　我かならず汝とともにあるべし　聖書は教えでなくドラマ　我は在りて在らしむる者なり　聖書は暗号　キリストの現象体として　永遠の今　相対的な肉体の死を乗り越える　出会いの幕屋　無の教会　聖霊内住の幕屋的実存　言い逆らいの徴　殉教者の第一　聖霊の義士　魂は肉体を支配

【使徒行伝６】

1そのころ弟子のかず増し加わり、ギリシヤ語のユダヤ人、その寡婦らが日々の施済に漏されたれば、ヘブル語のユダヤ人に対して呟く事あり。2ここに十二使徒すべての弟子を呼び集めて言う『われら神の言を差措きて、食卓に事うるは宜しからず。3然れば兄弟よ、汝らの中より御霊と智慧とにて満ちたる令聞ある者七人を見出せ、それに此の事を掌どらせん。4我らは専ら祈をなすことと、御言に事うることとを務めん』5集れる凡ての者この言を善しとし、信仰と聖霊とにて満ちたるステパノ及びピリポ、プロコロ、ニカノル、テモン、パルメナ、またアンテオケの改宗者ニコラオを選びて、6使徒たちの前に立てたれば、使徒たち祈りて手をその上に按けり。

7かくて神の言ますます弘り、弟子の数エルサレムにて甚だ多くなり、祭司の中にも信仰の道に従えるもの多かりき。

8さてステパノは恩恵と能力とにて満ち、民の中に大なる不思議と徴とを行えり。9ここに世に称うるリベルテンの会堂およびクレネ人、アレキサンデリヤ人、またキリキヤとアジヤとの人の諸会堂より、人々起ちてステパノと論ぜしが、10その語るところの智慧と御霊とに敵すること能わず。11乃ち或者どもを唆かして『我らはステパノが、モーセと神とを瀆す言をいうを聞けり』と言わしめ、12民および長老・学者らを煽動し、俄に来りてステパノを捕え、議会に曳きゆき、13偽証者を立てて言わしむ『この人はこの聖なる所と律法とに逆う言を語りて止まず、14即ち、かのナザレのイエスは此の所を毀ち、かつモーセの伝えし例を変うべしと、彼が云えるを聞けり』と。15ここに議会に坐したる者みな目を注ぎてステパノを見しに、その顔は御使

の顔の如くなりき。

【使徒行伝7】

1かくて大祭司いう『此等のこと果してかくの如きか』2ステパノ言う『兄弟たち親たちよ、聴け、我らの先祖アブラハム未だカランに住まずして尚メソポタミヤに居りしとき、栄光の神あらわれて、3「なんじの土地、なんじの親族を離れて、我が示さんとする地に往け」と言い給えり。4ここにカルデヤの地に出でてカランに住みたりしが、その父の死にしのち、神は彼を彼処より汝らの今住める此の地に移らしめ、5此処にて足、蹈立つる程の地をも嗣業に与え給わざりき。然るに、その地を未だ子なかりし彼と彼の裔とに所有として与えんと約し給えり。6神また其の裔は他の国に寄寓人となり、その国人は之を四百年のあいだ奴隷となして苦しめん事を告げ給えり。7神いい給う「われは彼らを奴隷とする国人を審かん、然るのち彼等その国を出で、この処にて我に事えん」8神また割礼の契約をアブラハムに与え給いたれば、イサクを生みて八日めに之に割礼を行えり。イサクはヤコブを、ヤコブは十二の先祖を生めり。9先祖たちヨセフを嫉みてエジプトに売りしに、神は彼と偕に在して、10凡ての患難より之を救い出し、エジプトの王パロの前にて寵愛を得させ、また智慧を与え給いたれば、パロ之を立ててエジプトと己が全家との宰となせり。11時にエジプトとカナンの全地とに饑饉ありて大なる患難おこり、我らの先祖たち糧を求め得ざりしが、12ヤコブ、エジプトに穀物あるを聞きて、先ず我らの先祖たちを遣す。13二度めの時ヨセフその兄弟たちに知られ、ヨセフの氏族パロに明かになれり。14ヨセフ言い遣して己が父ヤコブと凡ての親族と七十五人を招きたれば、15ヤコブ、エジプトに下り、彼処にて己も我らの先祖たちも死にたり。16彼等シケムに送られ、曾てアブラハムがシケムにてハモルの子等より銀をもて買い置きし墓に葬られたり。17かくて神のアブラハムに語り給いし約束の時近づくに随いて、民はエジプトに蕃えひろがり、18ヨセフを知らぬ他の王、エジプトに起こるに及べり。19王は悪計をもて我らの同族にあたり、我らの先祖たちを苦しめて、其の嬰児の生存うる事なからんよう、之を棄つるに至らしめたり。20その頃モーセ生まれて甚うるわしくして三月のあいだ父の家に育てられ、21遂に棄てられしを、パロの娘ひき上げて己が子として育てたり。22かくてモーセはエジプト人の凡ての学術を教えられ、言と業とに能力あり。23年齢四十になりたる時、おのが兄弟たるイスラエルの子孫を顧みる心おこり、24一人の害わるるを見て之を護り、エジプト人を撃ちて、虐げらるる者の仇を復せり。25彼は己の手によりて神が救いを与えんとし給うことを、兄弟たち悟りしならん

と思いたるに、悟らざりき。26翌日かれらの相争うところに現れて和睦を勧めて言う「人々よ、汝らは兄弟なるに、何ぞ互に害うか」27隣りを害う者モーセを押退けて言う「誰が汝を立てて我らの司また審判人とせしぞ、28昨日エジプト人を殺したる如く、我をも殺さんとするか」29この言により、モーセ遁れてミデアンの地の寄寓人となり、彼処にて二人の子を儲けたり。30四十年を歴て後シナイ山の荒野にて、御使、柴の焔のなかに現れたれば、31モーセ之を見て視るところを怪しみ、認めんとして近づきしとき、主の声あり。曰く、32「我は汝の先祖たちの神、即ちアブラハム、イサク、ヤコブの神なり」モーセ戦慄き敢えて認むることを為ず。33主いい給う「なんじの足の鞋を脱げ、なんじの立つところは聖なる地なり。34我エジプトに居る我が民の苦難を見、その歎息をききて之を救わん為に降れり。いで我なんじをエジプトに遣さん」35斯く彼らが「誰が汝を立てて司また審判人とせしぞ」と言いて拒みし此のモーセを、神は柴のなかに現れたる御使の手により、司また救人として遣し給えり。36この人かれらを導き出し、エジプトの地にても、また紅海および四十年のあいだ荒野にても、不思議と徴とを行いたり。37イスラエルの子らに「神は汝らの兄弟の中より、我がごとき預言者を起こし給わん」と云いしは此のモーセなり。38彼はシナイ山にて語りし御使および我らの先祖たちと偕に荒野なる集会に在りて汝らに与えん為に生ける御言を授りし人なり。39然るに我らの先祖たちは此の人に従うことを好まず、反って之を押退け、その心エジプトに還りて、40アロンに言う「我らに先だち往くべき神々を造れ、我らをエジプトの地より導き出しし、かのモーセの如何になりしかを知らざればなり」41その頃かれら犢を造り、その偶像に犠牲をささげて己が手の所作を喜べり。42爰に神は彼らを離れ、その天の軍勢に事うるに任せ給えり。これは預言者たちの書に「イスラエルの家よ、なんじら荒野にて四十年の間、屠りし畜と犠牲とを我に献げしや。43汝らは拝せんとして造れる像、すなわちモロクの幕屋と神ロンパの星とを舁きたり。われ汝らをバビロンの彼方に移さん」と録されたるが如し。44我らの先祖たちは荒野にて証の幕屋を有てり、モーセに語り給いし者の、彼が見し式に循いて造れと命じ給いしままなり。45我らの先祖たちは之を承け継ぎ、先祖たちの前より神の逐いいだし給いし異邦人の領地を収めし時、ヨシユアとともに携え来りてダビデの日に及べり。46ダビデ神の前に恩恵を得て、ヤコブの神のために住処を設けんと求めたり。47而して、その家を建てたるはソロモンなりき。48されど至高者は手にて造れる所に住み給わず、即ち預言者の49「主のたまわく、天は我が座位、地は我が足台なり。汝等わが為に如何なる家をか建てん、わが休息のところ

は何処なるぞ。50わが手は凡て此等の物を造りしにあらずや」と云えるが如し。
51項強くして心と耳とに割礼なき者よ、汝らは常に聖霊に逆う、その先祖たちの如く汝らも然り。52汝らの先祖たちは預言者のうちの誰をか迫害せざりし。彼らは義人の来るを預じめ告げし者を殺し、汝らは今この義人を売り、かつ殺す者となれり。53なんじら、御使たちの伝えし律法を受けて、尚これを守らざりき』

54人々これらの言を聞きて、心いかりに満ち切歯しつつステパノに向う。55ステパノは聖霊にて満ち、天に目を注ぎ、神の栄光およびイエスの神の右に立ちたもうを見て言う、56『視よ、われ天開けて人の子の神の右に立ち給うを見る』57ここに彼ら大声に叫びつつ、耳を掩い心を一つにして駆け寄り、58ステパノを町より逐いいだし、石にて撃てり。証人らその衣をサウロという若者の足下に置けり。59かくて彼等がステパノを石にて撃てるとき、ステパノ呼びて言う『主イエスよ、我が霊を受けたまえ』60また跪づきて大声に『主よ、この罪を彼らの負わせ給うな』と呼ばわる。斯く言いて眠に就けり。

●キリストの見えざる手の按手

1そのころ弟子のかず増し加わり、ギリシヤ語のユダヤ人、

これは所謂「ヘレニスティ」という人です。

その寡婦らが日々の施済に漏されたれば、ヘブル語のユダヤ人に対して呟く事あり。

これは「ヘブライデス」というヘブル語で、元来パレスチナの生粋のユダヤ人ですが、

2ここに十二使徒すべての弟子を呼び集めて言う『われら神の言を差措きて、食卓に事うるは宜しからず。

これは食事の分配のことです。さきほどの「施済」というのは「ディヤコニヤ」といって、いろいろこれも具体的な分け合いのことです。

3然れば兄弟よ、汝らの中より御霊と智慧とにて満ちたる令聞ある者七人を見出せ、それに此の事を掌どらせん。4我らは専ら祈をなすことと、御言に事うることとを務めん』5集れる凡ての者この言を善しとし、信仰と聖霊とにて満ちたるステパノ及びピリポ、プロコロ、ニカノル、テモン、パルメナ、またアンテオケの改宗者ニコラオを選びて、6使徒たちの前に立てたれば、使徒たち祈りて手をその上に按けり。

所謂「按手」です。選ぶときの大事な条件として「御霊と智慧とにて満ちたる」と、御霊のことがはっきりと言われていて、使徒たちは祈って手を置いたと言われていますが、これも御霊による按手であって、儀式的な按手ではない。按手のことは旧約聖書の民数記略

の27章18節に、

「エホバ、モーセに言いたまわくヌンの子ヨシュアという霊のやどれる人を取り汝の手をその上に按き」（民数記略27・18）

ということが書いてある。「霊のやどれる」というのは、むしろ霊を宿るように汝の手をその上に按くということ。モーセがヨシュアに按手をするところです。23節に、

「その手をこれが上に按き之に命ずることを為しエホバのモーセをもて命じたまえる如くなせり」（民数記略27・23）

「その手をこれが上に按き」とモーセが手を按いて按手をするとき、モーセを通して神の霊が按手をされた人に伝えられるわけです。

もともと使徒行伝2章においてペンテコステというのは聖霊降臨です。キリストが自らそこに集まっていた人たちに霊の見えざる手を按かれたといってもいい。聖霊が降って来たのは、キリストの見えざる手の按手によったとみてよいわけです。

キェルケゴールがこのペンテコステの事態をある角度から批判していますが、これは必ずしも当たらないと思います。

「ペンテコステの聖霊降臨のあと、どのように御霊を受けた事態を真に深めていったか」

ということに問題はありましょうが、それ自身は批判を許さない厳かな事柄です。そういうわけで、使徒たちが選ばれた7人に按手をした。しかも、その按手をされる連中が、「御霊と智慧とにて満ちたる令聞ある者」即ち、

「信仰と聖霊とにて満ちたるステパノ及びピリポ……を選びて、6使徒たちの前に立てたれば、使徒たち祈りて手をその上に按けり。」

と、いよいよ使徒たちにより加持されたわけです。今ならば、

「神学をどれくらい勉強したか、どれくらい教会史、教理史の勉強をしたか、ギリシヤ語、ヘブライ語がどのくらいできるか、聖書知識はどのくらいあるか」

といったことが大事な資格でありまして、御霊、信仰というものがここに言われているような角度において、第一義として本当に取り上げられているかということになると、大分問題があるだろうと思います。

「智慧」といっても、単なる詰め込みの知識ではない。御霊に導かれての本当の智慧であって、御霊を離したところの智慧を単に単独に考えているわけではない。

7かくて神の言ますます弘まり、弟子の数エルサレムにて甚だ多くなり、祭司の中にも信仰の道に従えるもの多かりき。

8さてステパノは恩恵と能力とにて満ち、民の中に大なる不思議と徴とを行えり。

パウロが勿論そうでした。大いなる不思議と徴とを行った。大いなる能力ある業というよ

うなことが書いてある。ステパノは恩恵と聖霊の能力とにて満ちていた。ですから、このステパノは完全な聖霊の人であって、そうでなければ、この不思議と徴とを行えないわけです。ところが、

9ここに世に称うるリベルテンの会堂およびクレネ人、アレキサンデリヤ人、またキリキヤとアジヤとの人の諸会堂より、人々起ちてステパノと論ぜしが、10その語るところの智慧と御霊とに敵すること能わず。

ステパノは神の智慧と御霊とによって相手に立ち向かって行った。所謂、理性的なまた学問的な、または律法的な智慧、知識といったものではない。これはコリント前書2章に書かれているような角度の智慧です。ですから、太刀打ちができない。

11乃ち或者どもを唆かして『我らはステパノが、モーセと神とを瀆す言をいうを聞けり』と言わしめ、

ねたみますから、彼らは「或者どもを唆かして、ステパノがモーセと神とを瀆す言をいう」と言わしめた。キリストの場合と同じです。

12民および長老・学者らを煽動し、俄に来りてステパノを捕え、議会に曳きゆき、13偽証者を立てて言わしむ『この人はこの聖なる所と律法とに逆う言を語りて止まず、

彼らは議会即ちサンヒドリンに曳きゆき、偽って偽証者を立てて、

「この人はこの聖なる所、即ち、神殿と律法とに逆う」

と言わせた。このことは非常に大切なことでして、彼らは神殿宗教、律法宗教、誠律宗教ですから。

14即ち、かのナザレのイエスは此の所を毀ち、かつモーセの伝えし例を変うべしと、彼が云えるを聞けり』と。

今までの伝統的な礼拝の神殿、今でいうとローマ・カトリックの大本山とかいうようなものですが、それとモーセの律法、金科玉条としているところの律法によると、

「いろんな判例というものを変えているとんでもない人である、異端である」

というわけです。

●ステパノの大演説

15ここに議会に坐したる者みな目を注ぎてステパノを見しに、その顔は御使の顔の如くなりき。

1かくて大祭司いう『此等のこと果してかくの如きか』

証言の通りかと言った時に、ここにステパノの大演説が7章全体にわたって始まるわけです。今、私たちがこのステパノの大演説を逐語的に追って、これを旧約聖書に当たって尋ねて行ったならば、ずっと当たらなければならないので一晩かかってもダメです。ここに

重点を置いて読みたいと思います。一体ステパノはどういうところに重点を置いているのか、それは読んでみなければわかりませんが、一応読んで行きます。

2ステパノ言う『兄弟たち親たちよ、聴け、我らの先祖アブラハム未だカランに住まずして尚メソポタミヤに居りしとき、栄光の神あらわれて、3「なんじの土地、なんじの親族を離れて、我が示さんとする地に往け」と言い給えり。4ここにカルデヤの地に出でてカランに住みたりしが、その父の死にしのち、神は彼を彼処より汝らの今住める此の地に移らしめ、5此処にて足、蹈立つる程の地をも嗣業に与え給わざりき。然るに、その地を未だ子なかりし彼と彼の裔とに所有として与えんと約し給えり。

栄光の神があらわれて、ここは創世記の12章のところでありますが、旧約聖書をお持ちの方は所々、お開きになったらいいでしょう。

「爰にエホバ、アブラムに言いたまいけるは汝の国を出で汝の親族に別れ汝の父の家を離れて我が汝に示さん其地に至れ」（創世記12・1）

これが約束への第一言です。御承知の通り、アブラハムは旅をしていて西へ西へと旅をして行きました。イスラエルの民は旅人、また宿れる者であって、イスラエルの歴史が即ち一つの時間的な旅であって、空間的な旅をしながら歩いているのが彼らの日常生活です。時間的には神の歴史的な民族的な旅をしながら歩いている。私たちも人生は旅であると譬えられています。しかも私たちの人生はただ一個の人生ではない。この日本の歴史の一端を承っています。それと同時にこの世界の歴史、否、更に神の歴史の一端を承って、その一環をなしているところの神の歴史における一つの旅をしているわけです。

「始めであり終りである」

ところの神、この宇宙を完成なさろうとする神、神の国を来らそうとなさる、この神様の大目的、大意志、大御意の下に、この摂理の下に私たちはあるわけです。その意味において、非常に動的なのです。動きつつある。動きつつ働きつつある。

「我は今日もまた次の日も進み行かざるを得ず」

「我は父と共に働くなり」

というキリストです。ただじっと坐って瞑想している宗教ではない。現実に働いて旅をしている。足をもって歩いている。目的地に向かって進んで行くという、時間的、空間的な中を生命が動いているという姿。これは深く肝に銘記しておいてくださらないと困る。

●旅の神・約束の神

そしてまだ子供のいない時から、神様はアブラハムに、

「私はこういう地をお前にやるよ」

と約束をしてくださった。旅の神様であると同時に、約束の神様であられたわけです。

旧約聖書といい、新約聖書といい、キリスト、メシヤが来る、救い主が来るという約束が旧約聖書です。勿論、ユダヤ人は旧約聖書とは言わない。「律法・預言者及び諸書」「トーラー・ネビーム・ケスビーム」という。新約の立場から旧き「約束」「ディアテーケ」という。この旧き約束は先ずキリストが降臨した時に成就した。しかし、第二の新しき約束はキリストが再臨した時に、即ち「新天新地」、今の古き現実の歴史が終末に来て、それから新天新地が来るという、殊に黙示録において預言されているわけです。キリストもマルコ伝13章あたりで約束しておられます。この約束の下にある。私たちもキリストの約束の下に、偉大なる羔羊（こひつじ）の婚姻という最終の新天新地に対して、今や人類は新婦として約束の下にあるわけです。

しかし、神様の約束ですから、これは空約束ではない。正直、キリストは来た。必ずまたその如くに新しく再び来たり給う。イエス・キリスト自身が、

「我再び来る」

と約束し、聖霊もまた「来たり給う」と宣言しておられます、黙示録の一番終りで。

神様の約束は人間の約束と違って、これは確かなのです。その約束に対する信頼、これはアブラハムの信仰の内容です。

6 **神また其の裔（すえ）は他の国に寄寓人（やどりびと）となり、その国人（くにびと）は之を四百年のあいだ奴隷となして苦しめん事を告げ給えり。**

これはエジプトにおける半奴隷状態のイスラエル族、殊にヨセフ族が中心であるところの生活です。ガラテヤ書の3章あたりにも出てます。

7 **神いい給う「われは彼らを奴隷とする国人（くにびと）を審かん、然るのち彼等その国を出で、この処にて我に事（つか）えん」** 8 **神また割礼の契約をアブラハムに与え給いたれば、イサクを生みて八日めに之に割礼を行えり。イサクはヤコブを、ヤコブは十二の先祖を生めり。**

即ちこの「割礼」とは神のために聖別せられた民としての徴です。キリストの者として聖別せられた「洗礼」と同じことです。割礼のことは創世記の17章あたりに出てくる。

9 **先祖たちヨセフを嫉（ねた）みてエジプトに売りしに、神は彼と偕に在（いま）して、**

このヨセフというのはある意味においてイエスのひとつの先例、サンプル、型みたいな者です。創世記の37章以下に書いてあります。

10 **凡ての患難より之を救い出し、**

創世記の物語は、皆さん、お読みになって、すでに御承知のことと思います。

「お前達が私をエジプトに放逐したのではない。神様がかくなしたのである」

と兄弟たちに遭った時に言ったという有名な話がある。

エジプトの王パロの前にて寵愛を得させ、また智慧を与え給いたれば、パロ之を立ててエジプトと己が全家との宰（つかさ）となせり。 11 **時にエジプトとカナンの**

全地とに饑饉ありて大なる患難おこり、我らの先祖たち糧を求め得ざりしが、
12 **ヤコブ、エジプトに穀物あるを聞きて、先ず我らの先祖たちを遣す。**13 **二度めの時ヨセフその兄弟たちに知られ、ヨセフの氏族パロに明かになれり。**

初めて正体がわかったのです。

14 **ヨセフ言い遣して己が父ヤコブと凡ての親族と七十五人を招きたれば、…**
…… 36 **この人かれらを導き出し、エジプトの地にても、また紅海および四十年のあいだ荒野にても、不思議と徴とを行いたり。**37 **イスラエルの子らに「神は汝らの兄弟の中より、我がごとき預言者を起こし給わん」と云いしは此のモーセなり。**

●我かならず汝とともにあるべし

この所でモーセのことが相当くわしく出ています。これはちょっと顧みる必要がある。出エジプト記3章のところです。聖書の中でも最も重要なところの一つです。それをステパノが取り上げて、相当詳しく紹介したわけです。

モーセが羊を飼ってホレブの山に行ったら、神の使が柴の中の火焔の中に顕れた。彼は見るに柴は火に燃えているけれども柴は焼けない。普通の火とちがう。霊火、霊の火です。これは今の近代人にはわからない。しかし、御霊の祈りの世界で深くなると、この霊の火が燃える現象を見ることが時たまある。私がある時、やはりお話をして、祈りの場に立ったら、私の足の付近から火が燃えているのを見たと言う人があった。また、ある青年は祈っていたら、自分たちの囲りをずっと霊の火で取り囲まれたことを見たこともある。これは神様の恩寵のひとつの徴です。

そういう、火が燃えているのを見て、モーセは初めての体験ですから、これは一体何だろうと、見てあやしんだ。そうしたら、柴の中から声がして、

「モーセよ、モーセよ」

と呼び給うたので、それを聞いていると、

「ここに近づいてはいけない。お前は足から鞋を脱げ、ここは聖き地であるから」

特にモーセという人物を、今、神様はこれに――さっき、

「栄光の神これに顕わる」

とステパノが言っているように――栄光の神がこれを捉えて神の歴史を、神の業を、神の意志を進めようとなさった。モーセその人はただの人です。けれども、神様は、ある時にある人を選んで、それを神の目的のために使おうとなさる。このときにモーセは恐れおののいて、そこに平伏して、「面を蔽せり」と書いてある。何を神様はおっしゃるかといいますと、

「7 **エホバ言いたまいけるは 我まことにエジプトにおるわが民の苦患を観 また彼等がその駆使者の故をもて号ぶところの声を聞けり 我かれらの憂苦を知るなり 8 われ降りて かれらをエジプト人の手より救いいだし 之を彼地より導きのぼりて 善き広き地乳と蜜との流るる地……に至らしめんとす…… 10 然ば来れ 我なんじをパロにつかわし 汝をしてわが民イスラエルの子孫をエジプトより導きいださしめん**

お前はその役割を果たせという。けれども、モーセはとってもそんなことはできませんと言って辞退します。

11 モーセ神にいいけるは 我は如何なる者ぞや 我豈パロの許に往き イスラエルの子孫をエジプトより導きいだすべき者ならんや

けれども、神は言い給うに、

12 神いいたまいけるは 我かならず汝とともにあるべし 是はわが汝をつかわせる証拠なり」（出エジプト3・7～12）

「私は必ずお前と一緒にあるよ。これは私の徴だよ」

と。この前も「徴」ということを私は雑誌に書きましたが〔註：『曠野の愛』誌26号、１９５６年秋冬季合併号「言い逆らいの徴」〕。

「我かならず汝とともにあるべし。是はわが汝をつかわせる証拠なり」

「私はお前を離れない。私はお前と一緒にいる」

という。この素晴らしい人格的な二つにして一つなる関係。その如く、

「具体的にいるぞ」

というのが徴なのです。人格的なこの

「神が共にいる」

という相手は罪びとのモーセです。とうてい神様と一緒にいられないのですが、

「私がお前と一緒にいる」

といって、神様の方からこの罪のけがれた人間に近寄ってきて、

「私がお前と一緒にいるのだから、心配はいらないよ」

と。神様の恵みがかかってきた時に、

「それでも、私はこんな者ですから。私はもう少し立派になってから、それからお迎えしましょう」

ではない。あるがまま、そのままでいい。ただ大切なことは、ただ呆然としていることではない。あるがまま、そのままでいいのですが、本当に平伏して、もうそのまま神の前に投ずる。これが本当の謙遜なのです。そこで遠慮して後に引き下がることは本当の謙遜ではない。また、そうかといって、なれなれしく、「ああそうか」といっているのも、それもいかん。自分というものを本当に無価値なるものとして神様の前に投げ出して、

「あなたの聖意を成させ給え。貴神のためにお使いください」
といって無条件に神の恵みに向かって、「はい」と言って出て行くのが、これが本当の謙遜です。それを本当の敬虔（けいけん）という。敬虔というのは信心の意味ですよ。

●聖書は教えでなくドラマ

「我、汝と偕（とも）にあり」

なんて、普通はこんな神様がいるなんて決して考えない。また、そんなことを言われても、取りつくしまもないという始末です。しかし、聖なる神が、

「汝そこから鞋（くつ）を脱げ」

と言われた。その聖書の聖なる神が、

「私はお前に近づいて行くよ」

というのです。モーセがその神の前に平伏して、逃げて行かないで、そのあるがまま、泥のまま――泥靴はもちろん脱いだでしょうが、けれども自分というものは泥、罪なのです――けれども、そのままそこに平伏して、

「貴神（あなた）がおっしゃるのなら」

と言って、全てを神に委ねるというところに、聖なる神がその人を本当に聖なる者とする、その恵みの場が、事態が起こる。キリストは何のために降臨せられたか。天界に居られるキリストが何故ナザレのイエスとして降臨せられたか。天界と私たちの地界とは、これはどうにもならない。ただ、遙かかなたに思い浮かべて拝んでいたって、これはどうにもならない。キリストは私たちの中に降り立って、大工の子となり馬槽（まぶね）の中に生まれ、同じパンを食べ、同じく喉が渇きという、普通の人の子となって、そして私たちの一切を思いやることができる。しかし、思いやることができるのは、人間の同情と違って、本当の神的な聖と神的な愛と神的な力と神的な智慧とを持っておられる。ここに救いが私たちのただ中に臨んできた。瞑想の宗教ではない。この聖書の宗教は私たちに具体的に臨んできて具体的に救い上げるところの、具体的な神様の世界である。

「汝、神のことを瞑想せよ」
でもなければ、
「考えよ」
でもなければ、
「聖書の知識を貯（た）めよ」
でもなければ、
「註解書を読め」
でもない。私たちは観念ではないのです。本当にこういうように具体的な存在である。具体的なものを救い上げるには具体的な道よりか他にない。その具体的なものは単なる瞑想

の世界――勿論、私たちはある意味において瞑想ということを重んじはしますが、しかし――瞑想でただ悟入して悟るというような世界ではない。それは仏教の世界です。仏教でもただ単に悟る世界だけではないでしょう。とにかく、悟って入って行くのではなく、神の呼びかけつかみかかりに対して具体的に自分を投じて行って体受する、体で受けるというのが聖書の宗教の世界です。だから、皆さん、

「聖書は教えではありませんよ」

と私は言っている。聖書は教えでなく、「ドラマ」です。活劇であるから、聖活劇でありますから、その中の人物と自分がならなければ絶対に読めないのです。

モーセのことが書いてある出エジプト記３章のところに来たら、自分がモーセとならなければいけない。

「神が火の中にあらわれた」

と書いてあったら、その火の前に自分がモーセとなって、神とモーセとのこの場合に自分をすっかり入れて読まなくてはいけない。入って読み入って聞かなくてはならない。そうしたらば、読めてくる。

「我必ず汝と共にあるべし」

と。神様が汝と一緒にあるというのです。私の方では忘れるかも知れない。私は神様と一緒にいないかも知れない。けれども、神様は、

「私はお前と一緒にいる。お前は私を忘れている、そっぽを向いている、勝手なことをしている」

と、神様はちゃんと知っておられる。

「しかし、私は離れない。あなた方を離れない」

と。これは詩篇の139篇にちゃんと書いてある。

「我いずこにゆきて汝の聖霊を離れんや。我いずこに往きて汝の御前を逃れんや」

と書いてある。そういうのが神です。

「それでは神経衰弱になってしまう。神様がそうしょっちゅう来て、私たちを監視しているのでは」

なんて。けれども、神様はそこらの試験官や監視ではない。神様はいつも恵みをもって、忍耐をもって見ている。およそ事忍び、およそ事信じ、およそ事望み、およそ事耐えて、私たちを見ておられる。呼んでおられる。また、つかんでおられる。どんなことがあっても、私たちはいかなる審判にも、どこにおいても無条件に魂を開けば、

「我、汝と共にあるべし」

という神様にぶつかる。それにぶつからないところはない。到るところこれ神殿であります。到るところこれ天の門の開けたるところです。

●我は在りて在らしむる者なり

だから、モーセが、

「貴神（あなた）はいかなる神様ですか、もし皆が貴神のことを聞いたなら、私は何と答えたらいいですか」

と聞いた。

「13モーセ神にいいけるは 我イスラエルの子孫の所にゆきて 汝らの先祖等の神 我を汝らに遣わしたもうと言わんに 彼等もし 其名は何と 我に言わば何とかれらに言うべきや 14神モーセにいいたまいけるは 我は有りて在る者なり 又いいたまいけるは 汝かくイスラエルの子孫にいうべし 我有りという者 我を汝らに遣（つかわ）したもうと」

「私は有りて在るものなり。私有りという者、汝をつかわす」

と言って、そう答えよと。

「我在りて在る者」

という。これを私は実存の神という。

「在りて在る」

という日本語の方が強くていい。

「私はあるであろうところの者であるであろう」

“I will be that what I will be.”

が英訳で、これも文法的には“will be”〔であろう〕ですけれども、この言葉の表現は“will be”だけではない。むしろ、

「在る」「現に在りつつある」「在らんとして常に在っている」

それはもうひとつ私に言わしめるならば、

「我は在りて在らしむる者なり」

と読みたい。同じ文法でありながら、ある角度から「在らしむる」とも読める。「在りて在らしむる」なんていう読み方は世界中どこの学者もしていないと私は思う。けれども、私はそう読みたい。

「我は在りて在らしむる者なり」

と。神様は常に自分が在るということによって私たちを在らしめている。

太陽は地球のはるか彼方にあって、地球上の全ての生きとし生ける者を在らしめている。その通り、神は在ることによって私たちを在らしめているのであって、「ただ在る」なんていっているのではない。有神論で、

「神は有るか、無いか」

そんなことはいくら論じていてもいいですよ。結論が「神有り」となったって、「神無し」となったって、そんなことで神様はどうにもならない。人間の論議でもって神様はどうに

もならない。

「神様が有る」

なんていうことは、人間が考え出して、「神は有る」なんていうものではない。私たち皆が、「神は無い」なんて否定したって、神様は有るのです。有るものは必ず勝っていく。

●聖書は暗号

神様を蔑(あなど)れば人類は必ず亡びる。20世紀がもし神をどこまでも否定して勝手なことをやっていれば、どこかで引っくり返ってしまう。これは事実が審判していく。

「世界歴史は世界審判史なり」

〔註：「世界史は世界の審判なり」Die Weltgeschichte ist das Weltgericht（シラーの詩句）〕

という有名な言葉があるけれども、神様は審判しようなんて思っていない。けれども、人間が自ら神の審きを招いてしまっている。神様は恵もう恵もうとしているのですが、

「恵みは要らない、審きを下さい」

と言っている。せっかく永遠の生命という御馳走をやろうとしているのに、

「永遠の生命だけは要らない。その他のいろんなものを下さい」

という。この永遠の生命を受けとらないから、文化人は細々となってしまっている。「在りて在らしむる」という神様にぶつかったなら、これが即ち栄光の神です。その実在にぶつかる。

聖書にはいろいろと不思議なことがたくさん書いてある。すると、

「そんな不思議なことがあるだろうか？」

と思う。創世記なんかをいきなり読むと、ヘビがエバを誘ったりする。

「ヘビがいったい語るなんて、そんなことは物語だ」

と。それは物語ですよ。

「ヘビがエバに語って、エバが禁断の木の実を食う」

なんてことは物語です。物語だというと、それをすぐ捨ててしまうからダメなのです。物語を通して神様は驚くべき現実を語っている。これが読めない。物語を通して現実を語っている。聖書は、極端にいうと、暗号ですよ。

「この暗号が読めるか」

ということ。ですから、キリストは、

「聞く耳ある者は聞くべし」

と言う。暗号で語っているが、暗号の元の神様の本当の意味がわかっているのかという。キリストはみな暗号で語った。譬話(たとえばなし)はみなこれ暗号ですよ。譬話にてキリストは、

「天国は一粒の芥種(からしだね)の如し」

と言われました。具体的な生命の世界は具体的な表現をするよりしようがない。観念で言ったっていいですよ。けれども、観念で言ったのでは、どうしてもはみ出してしまう。実にキリスト自身が言中の言であったわけです。

モーセは今この神にぶつかって――神は超絶の神ですよ――一体どういうことなのだろうかと、いくら考えてもわからない。神様はとにかくモーセを捉えてその現象面を通して現われた。火の焔、また声をもって現われてきた。神様はこちらからは絶対に不可知です、いくら尋ねたって。神の方から現われてきた。それ自身が神ではない。それ自身は神の一つの現象面です。しかしながら、その現象面において、即本体が本当に信じ掴めるかどうかが問題なのです。現象それ自身を、

「本当だろうか、これはウソだろうか？」

と考えていたって、もし本当という結論が出てきたって、それでは始まらない。現象において真に我々の捕捉すべからざるところの本当の本体をぐっとつかまえるかどうかに、信仰の秘訣がかかってくる。それでその人は単に現象を求めない。現象を見て本体をつかまえる。

花は咲いている。花において太陽の光熱を直観する人はこの花を見ている人なのです。こうやっていろいろ花弁が幾つで、どうのこうのと表面だけを観ている人は、この花の本質を見ていない。そうすると、

「これは花弁が足りないから、これは本物ではない」

と、いろんなことをやる。そんなことをしていたのでは、それは生命をつかみそこなう。

聖書の読み方は、あなた方は、魂がすごい弾力性をもって読まなければダメですよ。そして、魂に弾力性ができてくると、聖書は無限に私たちの魂にいよいよすごい無限の迫力をも与えてくださる。

●キリストの現象体として

モーセは神様に捉えられましたら、

「我、汝と共にあり」

という角度と共にイスラエルの連中を率いて紅海を渡って行った。曠野の旅でもって驚くべき不思議なことが次から次へと起こってきた。

私はこの間、あの「シネラマ」という映画を初めて見た。エジプトの方からちょうどモーセの出エジプトと同じ方から、低空飛行にてやや小さな飛行機でもってシナイ山のあの曠野の所を映していた。本当に曠野ですね。パレスチナの南の方からヘブルン、死海、ヨルダン河。それからエルサレムに降りて、キリストのゴルゴタへの道をたどったり、ステパノの殉教の場所もその時に示しました。それから、ガリラヤ湖、ナザレを実際に写して、これは本当に私はありがたかったですね。シネラマというのは、三方から立体的に映すそ

うです。自分たちがそこに本当に飛行機に乗っかって旅しているような感じですよ。

あのシネラマ式に聖書を読まなければダメなんです。自分が聖書の活劇中の人となって、モーセとなってやらなければ、聖書は読めない。スクリーンで動いているなんていうのではダメです。自分も動かなくてはならない。下手すると二階から落っこちるぐらいに、見ていないと本当ではない。

モーセがそのようにして神に捉えられましたから、神の力がモーセを通して働いた。不思議と徴とがそこに現象してきた。モーセ自身が神の徴となり、神の現象体となり、神の栄光の徴としてあった。あなた方一人ひとりが神のキリストの現象体としてそこに坐っているのでなければ、本当に聖書を私と一緒になって読んでいるというのではないですよ。私はお説教なんかしているのではないから。皆さんと一緒にこの聖書の中に入って行っているだけです。

私たちが「神の現象体」となっていくときに、「不思議と徴」とが起きてくる。不思議と徴を求めてはいけない。これは御利益になるから。けれども、御意のままに、不思議と徴とは展開してくる。これが、

「観念に非ず、御利益に非ず」

と私が申し上げる所以（ゆえん）です。観念に非ず御利益に非ず、中央の大道がある。正道がある。この正道を本当に私たちが行こうというのが「原始福音」と申し上げる所以です。観念に安住し、

「聖書の研究、研究」

といっているのは、どちらかというと観念です。それから、何か「病気が治る」とか、「幸福になる」とか、「事業が成功する」とかを、求めている新興宗教的なのは、これ御利益です。どちらでもない現象に対して本体的角度から自由になって、預言者モーセや使徒たちと同質の角度に私たちはなりたい。でなければ、「聖書、聖書」といっても何がいったい聖書かと言いたくなってくる。

皆さんはこれを今、受けつつあるから、何だか知らないけれども、生命が内から出てきたのです。力が出てきた。そして、正直、何か知らないけれども、他の人たちと違ったキリストの種が、神の種、キリストの種たる聖霊が宿ってくるからです。これが生命です。このステパノという人は御霊と智慧とに満ち、信仰と聖霊とに満ちていた。

●永遠の今

信仰とは「神を受けとる」ことであり、「キリストを受けとる」ことなのです。どこまでも神様は現実の神ですよ。

「我在りて在らしむる」

ところの現実の神です。聖書の宗教ほどはげしいのっぴきなら現実はない。この一刻を、

真にキリストを捉えたら、

「いつ死んでも、然り、アーメン、ハレルヤ！」

である。そういう現実の神であるからこそ、過去を本当に生かし、未来を本当に来らせるという不思議なことができる。その現実は、単なる時間の過去と現在と未来という、そんな現在ではないですよ、今、私が「現実」というのは。相対的現在の奥のある世界というのが「永遠の今」であります。「永遠」というものを捉えている。私たちはこの生ける神に、「在りて在らしむる」神に共にある時に、私たちは永遠を捉えているのです。

「永遠とはどういうのであろう。えらく遠そうだなぁ」

と、そんなのではない。永遠は皆さんのじかじかの所に来ている。私たちは時間を捉まえるという。永遠という時間を捉まえる者は神を捉まえることであり、神に捉えられた人が永遠という時間を持っている。

この変り行く時の中に永遠というものを持つ、捉えるというこの秘訣は生ける神と一つとなること。生ける神の中に生きているという生命になったならば、時間に対して支配的になる。

時間をいくら瞑想し考えたってどうにもならない。その点ではアウグスチヌスの『告白録』の第13章の時間論は素晴らしいけれども、なお足りない。私たちの角度はきわめて実存的な角度から時間を捉えて行く。そして永遠を捉まえることによって時間を支配して行く。だから、過去に対しても、未来に対しても支配的になり得る。神に在ってですよ、勿論。本当に現実を生きている人は、

「神の国が来るということは確かである」

ということが告白できる。

「神の国は必ず来ます」

ということが言える。何か不思議なことのようですが、そうではない。それは神の国は今来ているから。

「神、我と共に在り」

ということは天国が来ているということです。

「懼れるなかれ、我、汝と共にあり」

と言ったときにモーセは、

「我はエホバの神という天国体をいただいている」

というわけです。モーセの中に天国が来ている。

●相対的な肉体の死を乗り越える

ですから、私たちがその意味において、

「たとえ死の蔭の谷を渡るとも、わざわいを懼れず。汝我と共にあり」

という、詩篇23篇の有名な言葉は、天国が来ているから、もう死の蔭も何もあったものではない。私たちの相対的な肉体の死なんていうものは、この角度を本当に捉えていれば乗り越えている。

信仰はなまやさしいことではない。いい加減なことをしていれば、いざという時に私たちはうろたえるわけです。けれども、そのいざという時にうろたえないためには、毎日が死を乗り越えていなければならない。

「私は死を乗り越えて現実を生きています」

ということを、なにも人に言わなくてもいいけれども、それを本当に自分の中において告白できるならば皆さん、病を治していただきたいという、その切なる願いは、神が共にあるということになったら、

「私の病はもうどこかにすっとんでいました。病人でありながら、もう病める身はどこかに行ってしまいました。私は神様と一緒にいたらば、ここに永遠の生命がありました。今、相対的にどんなに病んでいたって、そんなことはびくともしません」

と。この中にある神が共なるときに、どうして永遠の生命がないか。そんな神様は神様ではない。私たちに一番究極的な素晴らしいものを与えようとしているのは、この「神共にある」というからです。御利益もへったくれもない。そういう現実に自分も現象体になっているのですから、そうした受け方をしたならば、あなた方の肉体にも変化が来る。

そういうわけで、私もここに来るまでは、少し疲れていましたけれども、ここに来て皆さんと聖書の中に入って来たならば、だんだんエネルギーが出てくる。神様のエネルギーが上から来るからです。

●出会いの幕屋

38 **彼はシナイ山にて語りし御使および我らの先祖たちと偕に荒野なる集会に在りて汝らに与えん為に生ける御言を授りし人なり。**

面白いですね。「生ける御言」という。殊にこの生ける御言、これは観念の言ではない。

「我が言は霊なり生命なり」

と、キリストはヨハネ伝6章において言っておられる。今のクリスチャンはこれを受けとれないと、どうしてもダメです。

「聖書は何を言っているのだろうか。この先生はこのように解釈するし、あの先生はああいうように解釈するし」

なんて。解釈が何ですか。釈義なんていうものをあなた方は乗り越えてください。水を割らずに、端的にこのキリストの言は直ちに言います。それを文字面にこだわって、勿体ぶっていることではない。キリストの言は一つの暗号だから、その暗号みたいなキリストの

言において、その本体を捉えて、キリストの言の奥に、モーセの言の奥に、預言者の言の奥に、いきなりキリストの言を発しているキリストそのものを捉えるということです。

「我が言は霊なり生命なり」

と、生命なるキリストから発している言が、生命であり霊なるキリストから発している言が、霊なのであり生命である。

これは幹です。幹は生きています（机上の花を指示しながら）。この生きている幹から発しているところのこれは花です。花という言において直ちにこの幹と根っことをぐっと捉まえるかどうかです。そこが即ち、「我が言は霊なり生命なり」で、聖書の言を絶対に頭で読んではダメです。これは御霊の光によってこれを読む。電灯の光ではないですよ。

「御霊の光といっても、困るなぁ」

なんて、困らないです。まぁだんだん行きましょう。

39 **然るに我らの先祖たちは此の人に従うことを好まず、反って之を押退け、**
その心エジプトに還りて、

彼らは曠野においてさんざんつぶやいて、

「ああエジプトの肉のなべの側の方が良かった。なぜ俺たちはこんな曠野をモーセに連れられて行くのか」

と言う。

40 **アロンに言う「我らに先だち往くべき神々を造れ、我らをエジプトの地より導き出しし、かのモーセの如何になりしかを知らざればなり」** 41 **その頃かれら犢を造り、その偶像に犠牲をささげて己が手の所作を喜べり。** 42 **爰に神は彼らを離れ、その天の軍勢に事うるに任せ給えり。これは預言者たちの書に「イスラエルの家よ、なんじら荒野にて四十年の間、屠りし畜と犠牲とを我に献げしや。** 43 **汝らは拝せんとして造れる像、すなわちモロクの幕屋と神ロンパの星とを舁きたり。われ汝らをバビロンの彼方に移さん」と録されたるが如し。**

今度は神々です。信仰的な姦淫です。出エジプト記の25章から27章にある。

44 **我らの先祖たちは荒野にて証の幕屋を有てり、**

ここのところは27章のところに出ている。ここのところは大事ですよ。

モーセに語り給いし者の、彼が見し式に循いて造れと命じ給いしままなり。
45 **我らの先祖たちは之を承け継ぎ、先祖たちの前より神の逐いいだし給いし異邦人の領地を収めし時、ヨシユアとともに携え来りてダビデの日に及べり。**

勿論、ステパノの告白の中には宗教史的に見て誤差はあります。しかし、そんなことは大して問題ではありません。

46 **ダビデ神の前に恩恵を得て、ヤコブの神のために住処を設けんと求めたり。**

47**而して、その家を建てたるはソロモンなりき。**

サムエル後書の7章です。

48**されど至高者（いとたかきもの）は手にて造れる所に住み給わず、即ち預言者の**49**「主のたまわく、天は我が座位（くらい）、地は我が足台なり。汝等わが為に如何なる家をか建てん、わが休息（やすみ）のところは何処なるぞ。**50**わが手は凡て此等の物を造りしにあらずや」と云えるが如し。**

イスラエルはモーセを通しての「証（あかし）の幕屋」を通して、神様とでっくわした。あるいは「出会いの幕屋」ともいいますが、集会となってしまったが、「集会」という訳はちょっと面白くないですね。神様はそこに降って来られて、そして共に語られた。モーセに語られた。即ち、旅をして日々に私たちに話しかけ、私たちは神に祈る。モーセはいつも畳んではまた担（かつ）いで行って、そして証の幕屋を張りながら、常に動的な幕屋の姿において動いて行った。神は常に生活において動いて導いて行った神である。

「昼は雲の柱、夜は火の柱となって道を示した」

と書いてあるように、いかにも動的な神であって、いたる所が幕屋・神殿・聖所である。それが、ある所に固定してしまって――勿論パレスチナに入ってしまえば、神殿を造ることも、ある意味においては当然ですよ――しかし、神殿の中に幕屋が置かれている。聖所・至聖所というわけです。とにかく、それが静的に定着してしまった。そこに信仰の危険がある。そのお宮というものが何か勿体ぶったことになったり、神殿にだけ神様のいらっしゃる所だと思って、他は何かすこしお留守みたいな感じになってしまった。まぁ普通のお宮宗教は、そういったものですね、お宮参りという。

●無の教会

しかし、私たちの生活は何処に行っても、あなた方はちょっと何処かに行っても――幕屋こそ、テントこそ垣（かきね）がないけれども、いたる所が――天国を担いで、幕屋を担いで、神そこに在（いま）し給うというのが、宗教の本当のすがたです。信仰生活の本当のすがたです。曠野において導いてくださったところの神、この曠野の如き世界において、常に神が共にいて天国を現じて行くというのが、旧新約を貫くところの本当の神であると思う。それが神殿宗教になって、そこに一つの生命の動脈硬化を来たした。だから、

「手にて造れる所には住まれない」

と、ここにダビデにも言っているわけです。

「お前たちは、神殿、神殿と言って、それで実存は、神の霊がどこかに行ってしまって、律法がすっかり外側からの誡律宗教になってしまっている。そういった角度から私は批判するが、実はモーセにおいて示されたところのエホバの神の事態はそうではないのであるぞ」

と。そこで預言者中の大預言者であるところのモーセの、幕屋の在り方がいかに大事であるかということに私は、あるとき気がついた。

「ただ無教会という否定的な表現ではダメだ、これは幕屋と言うべきである」

と。旧新約を貫いて幕屋という表現は黙示録の最終に到るまで、

「神の幕屋 人と偕にあり、神 人と偕に住み、人 神の民となり、神みずから人と偕に在(いま)して」

と書いてある。その意味において動的な幕屋の在り方、

「到る所これ神共にある」

という在り方。「神殿」でも、所謂「教会」ということでもなく――それは建物はあったっていいですよ――問題はそこにおいてとらわれやすいある間違った角度から、もっと本質的なところを表わしたいという願いから、私は「幕屋」という表現をしている。

しかし、ヨーロッパにも、アメリカにも「タバナクル」〔Tabernacle〕という教派があるそうですが、私はそんなことを知らなかったけれども、私はしかし、教派として「タバナクル」といっているのではない。教会の在り方として、ただ無教会といっているのではダメですよ。そのうちに「幕屋論」を書きますが、この無教会が、

「教会は形式的であり、教会は要らない。神様と直結していればいい。だから、無教会である」

という。しかし、無教会といったって一つの集会を持っているから、教会は型があったって、その型の中に本ものがあればそれでいい。否、一向さしつかえない。神のキリストの体としての教会、エクレシヤは厳然としてある。キリスト彼自身こそ教会はお建てにならなかった。しかし、キリストの集まりは根源的にキリストの体として弟子たちを捉えておられるのであるから、教会の本質も教会論をいえば、結局、そこに帰するわけです。それが無教会というのは歴史的事態に対する一つのプロテストとして出てきた言葉でして――相変わらず、教会、無教会はありますよね――けれども、

「無教会主義は本ものである。教会は少し間違っている」

なんて、人を審いてしまってはいかん。だから、私は主義主張が嫌いです。無教会主義はいやです。「無教会」もいいけれども、もっと積極的に「無の教会」といいたい。「無という教会」といいたい。即ち、自分というものがすっかり無くなっている我ですから、

「私は無なり。私は自ら何にもできない」

という私です。その無においてこそ、キリストの無限がくる。だから、「無教会」という言葉を使うのなら、私は「無の教会」という、「無の」という字を入れたい。しかし、「無の教会」というとややっこしいので、「幕屋」という言葉を使うのです。

それで幕屋の本質は無の教会にある。皆さんも、ここに教会の方もあるし、所謂無教会の方もあるでしょうが――何でもいいですよ――とにかく、問題は、

「それぞれの相対的な在り方において本ものがあるかどうか」にかかっている。人にどう思われたって本ものがあればいい。キリストはちゃんと見ていてくださる。また人に馬鹿に良さそうに見えても、本ものがなければ化けの皮です。

●聖霊内住の幕屋的実存

このステパノが言いたかったのは、

「神殿宗教や律法宗教ではない。モーセが捉えたこの動的な事態がどこまでも大事な伝統であり、この幕屋的な在り方が大事だ」

と。ステパノこそ私たちの幕屋の先駆者であると、新しく思う。幕屋の把握の先駆者、幕屋的実存として神と共に歩んでいた。「神と共に」は、なぜ神と共に歩んでいたか。聖霊が内住していたから神と共に歩めた。聖霊が内住していなければ、「神と共に」と心で思われ、観念で思われても、実力とはならない。だから、彼は聖霊にて満たされたる者、恩寵と御霊とに満ちている者という。生命が来ているからです。そういう事態で、

「私は何をもってお前たちに言われることがあるか」

というので、ステパノは最後に遂に宣言した。

51 **項強（うなじこわ）くして心と耳とに割礼なき者よ、汝らは常に聖霊に逆う、その先祖たちの如く汝らも然り。**

所謂、洗礼聖餐式的な割礼といったことをやり、律法というものを守っているように見えるけれども、実はこれは心かたくなで、「項強（うなじこわ）くして心と耳とに割礼なき者よ」という。

「イスラエルの民は項強（うなじこわ）き民である」

とは申命記にも書いてある。なかなか心が砕けない。パウロも項強（うなじこわ）き民だった。

52 **汝らの先祖たちは預言者のうちの誰をか迫害せざりし。彼らは義人の来（きた）るを預（あらか）じめ告げし者を殺し、汝らは今この義人を売り、かつ殺す者となれり。**

「言い逆らいの徴」と言いますが、汝らは聖霊に逆らっている。何に逆らっているか、私たちは答弁しません。罪びとですから。

けれども、福音の事態に対しては、即ち、聖霊において在るという実存の悲願霊願に対しては、私たちはこれを否むわけにはいかない。これを否定したならば、私たちは聖霊に対して、私たち自身が逆らうわけですから。どんなに攻撃されてもいい。いよいよ低くなって、キリストの前に平伏しているならばいい。私たちを攻撃するならば、それは聖霊に逆らうという事態になる。ステパノは素晴らしい。彼は、

「汝らは常に聖霊に逆らう」

と言い切った。彼は本当に聖霊に満ちているが、「自分の信仰」というのではない。自分の信仰というように信仰を私していない。

「キリストが素晴らしい。自分はあてにならない」

と言って自分を投げ出しているのが本当の信の世界です。この素晴らしいキリストに自分を委ねて――それはキリストの十字架です。十字架はパウロが説く前にステパノが実際に受けとって、キリストにすっかり贖いとられた者です――キリストに贖われた者ですから、彼の中にキリストの御霊が臨んでくる。キリストのこの贖罪、罪の贖いというものを彼は本当に全存在をもって受けとっていますから。

これはなんといっても関門です。十字架の罪の贖いを受けとらない者にはダメです。どんなに所謂霊的能力といっても、それはキリストにおける霊の事態ではなくなる。霊的傲慢というのは一番重い罪になります。

「汝らは常に聖霊に逆らう」という。キリストの前に本当に平伏し、我を無としてすっかり自覚する。私は言いたい。

「もし無教会、無教会と言うなら、なぜ本当に自分を無としていないのか。十字架、十字架と言うなら、自分をなぜ自分を無として自覚していないのか。ただ瞬間的に十字架を思って、『贖われています』なんていう、気休め的な信仰が何になるか」

と。この

「十字架につけられたり」

というパウロの事態は、その自分は本当にキリストの十字架によって無とされている。「無教会、無教会」とそんなことを大いに力んでいるうちはダメですよ。

こんなことを言うから、私は無教会の全ての人から嫌われる。

「藤井武という無教会の一番素晴らしい弟子のくせに、すっかりおかしくなってしまっている」

と。おかしくっても何でもいいですよ。私は神様の前に少しもおかしくないつもりですから。この聖霊がかく私をして告白せしめるから、どんな人が何と言おうと仕方がない。

私は今日、午前中は、「来し方行く末」という私の信仰の歴史をずっと語って、また行く末を語ったわけですが、この

「汝らは常に聖霊に逆らう」

という、ステパノの権威ある一言を静かに思う。今の一般のキリスト教の世界に向かって、「汝らは常に聖霊に逆らう」とステパノに言われた時に、本当にステパノに答え得ることが出来るかというわけです。

●言い逆らいの徴

51 **項強（うなじこわ）くして心と耳とに割礼なき者よ、汝らは常に聖霊に逆う、その先祖たちの如く汝らも然り。**

お前たちもあのモーセにつぶやいたところの先祖と同じことだよと。

52 **汝らの先祖たちは預言者のうちの誰をか迫害せざりし。**

どの預言者が迫害を受けなかったか、あのホセヤ、ミカ、イザヤ、エレミヤ、みな然らざるはなしと言っている。神の霊を受けると、

「エホバの霊我に臨めり」

という人になってくると、これは言い逆らいの徴に旧約時代からなってしまった。キリストも山上の垂訓にて言われました。

「喜びよろこべ、天にて汝らの報は大なり。汝等より前にありし預言者たちをも、斯く責めたりき。」（マタイ５・12）

と。

彼らは義人の来るを預じめ告げし者を殺し、汝らは今この義人を売り、かつ殺す者となれり。

「この義人」とはキリストのことですよ。しかもキリストをとうとう十字架につけてしまったではないですか。

53 **なんじら、御使たちの伝えし律法を受けて、尚これを守らざりき』**

聖霊に逆らっているから、この最大の預言者イエスを、唯一人の義人を、天上天下唯一人のひとキリストを、十字架につけてしまった。義人とは単なる正義の人ということではない。義人とは神様の御意を身に体して行じていく人を義人という。

「汝の御意をこの私を通して成さしめ給え」

とは傍観して言う言葉ではない。

「汝の御意をこの私を通して成さしめ給え」

と言って自分を投げ出している姿です。だから、この祈りは最も激しい祈りです。

「どうも分からないけれども、汝の御意を成さしてください」

なんていうのは、こんなのは祈りにはならない。この最も激しい祈りをキリストは生涯を通して成さしめられた。キリストは生涯を通して受けとって行った。これが本当に聖霊の人なのです。ですから、ステパノはとうとう、

「お前たちはモーセの本当の事態からずれてしまって、幕屋的な在り方からずれてしまって、神殿枯渇宗教となり、逆に生命の人、聖霊の事態に対して逆らっている。これはとんでもない間違いである」

と。所謂、正統派の人達が、「長老、学者らを唆して云々」といいますが、皆これなのです。キリストもそれなのです。使徒たちもみなそれにぶつかった。

54 **人々これらの言を聞きて、心いかりに満ち切歯しつつステパノに向かう。**

55 **ステパノは聖霊にて満ち、天に目を注ぎ、神の栄光およびイエスの神の右に立ちたもうを見て言う、**

私はこの一段は聖書の中でも何ともいえない一段であります。

56 **『視よ、われ天開けて人の子の神の右に立ち給うを見る』**

と彼は言った。霊界の天が開かれた。キリストは全能の神に任されている。

●殉教者の第一

57**ここに彼ら大声に叫びつつ、耳を掩い心を一つにして駆け寄り、**58**ステパノを町より逐いいだし、石にて撃てり。**

これはレビ記に書いてある。24章に。穢れたる者は町より外に出してやっつける。キリストの十字架もそうです。エルサレムの城外に出して、罪人はみな外です。町はけがされるからというわけです。

ところが、この大罪人といわれたキリストが叫び給えば、神殿の一番奥の聖所と至聖所との幕が切って落とされてしまった。この聖霊の事態に逆らったときに、キリストの叫びによって、彼らの一番大切にしている所の神殿の幕が上から二つに切られてしまった。

「お前たちは何を信じているのか。旧約は私を預言しているのではないのか。大祭司が一年に一回この至聖所に入って罪の贖いをする。羔がそこにおいて生贄になる。何回繰り返しても同じである。これは一つの徴であるに過ぎない」

と。何を指し示している徴かというと、大祭司はイエス・キリストであり、羔はまたイエス・キリストである。この大祭司にして羔なるキリストが今、

「十字架において汝らの罪をそっくり受けとった」

と言ったときに、この聖所と至聖所との間の幕がいらないというのです。これはキリストの実力であります。霊の実力でありまして、神の証です。これは私たちは、キリストの贖罪が如何に深刻な事態であるかということに気がつかなくてはしようがない。キリストの贖罪をいい加減な気持において十字架だなんて、実は言われないのです。

58**ステパノを町より逐いいだし、石にて撃てり。証人らその衣をサウロという若者の足下に置けり。**59**かくて彼等がステパノを石にて撃てるとき、ステパノ呼びて言う『主イエスよ、我が霊を受けたまえ』**60**また跪づきて大声に『主よ、この罪を彼らの負わせ給うな』と呼ばわる。斯く言いて眠に就けり。**

このステパノの両方の言はキリストの十字架上の言がそのままステパノの口にのぼってきた。主の第一の殉教者ステパノが全くキリストの霊によって動き、またそれを大胆に告白し、そして主の十字架を、

「汝、我が十字架を負いて我に従え」

というキリストの言を全く受けとって、彼は殉教者の第一となって天界に凱旋したのです。彼らはステパノを石にて打ったから、「こいつをやっつけた」と思ったが、どっこいそうではない。ステパノは打たれつつ、完全に勝ってしまった。これは彼が、

「視よ、われ天開けて人の子の神の右に立ち給うを見る」

と言う。そして彼が、

「**主イエスよ、我が霊を受けたまえ。主よ、この罪を彼らに負わせ給うな**」というような、このステパノの最終の天使の如きその姿。これはそこにいた一人のひとを打ったに相違ない。誰あろう、それはサウロ、後のパウロでありました。サウロは彼の殺さるるを可（よし）としていた。彼の眼は未だ開かれない。いよいよサウロは頑なになって、サタンに捕えられていく。己を義としているところの霊的なサタンに捕えられていく。パウロは自分を大いによしとしている。ステパノのこの驚くべき十字架の愛がサウロには見えない。

「**目あれど見えず、耳あれど聞こえず**」

というこの事態はキリストの十字架にぶつかって、私たちが倒れるまでは、聖書は「目あれど見えず、耳あれど聞こえず」です。聖書をどんなに研究して解ったように思っても、キリストの十字架で一回ぶっ倒れるまでは、これ見えず聞こえずです。これははっきり申し上げておきます。

●聖霊の義士

ステパノは遂に身をもってこの聖霊の事態を証し、彼自身が言い逆らいを受ける第一の徴となって、身を捨てて、キリスト教の教界史を血をもって書いたのです。

天国がこのような義人の血によって支えられている。本当のキリストの生命は、ステパノの血が流れても、ステパノの真理とその声とその生命は、決して枯渇していかない。彼はもう完全に肉体はどうなっても、彼の霊体はこの魂と共に凱旋して行ったのです。ステパノをしてかくなさしめたところの原動力は何処にあるか。これキリストの愛であります。キリストの愛の生命にステパノはすっかり自分が生きていた。このキリストの愛の生命、この聖霊の愛、愛の御霊、キリストの愛に愛されていたステパノは、キリストに捨てられることこそ、これ地獄である。しかしながら、キリストにゆるされ、キリストのもとに天界に走って行った。これまことの勝利です。真理のためには本当に神様の、

「**我は真理なり、道なり、生命なり**」

と言われた、真理そのものであるキリスト、道そのものであるキリスト、生命そのものたるキリストをどうして離れることができようか。一切の現実をつらぬいて、ステパノはこれに勝った。勝つことのできるのは私たちの信仰とか、私たちの聖書知識とか、そんなようなことでは勝てない。私たちの魂が本当に聖書の御言を化体せしめ、キリストの霊を本当に宿すという、この事態でなければ勝てない。またそれであるならば、一日一日が私たちに本当に生きがいのある一日である。この世の判断やら何やらをすっかり乗り越えて、何処で倒れても「アーメン・ハレルヤ！」と言えるようになる。

なぜ今のキリスト教の世界がこのステパノを第一に認めないか。使徒たちの最初の殉教者ステパノは第一の使徒であると言ってもいいと私は思う。所謂、他の使徒たちよりも最

初に身を捨ててキリストの後に従って行った。即ちあの大使徒パウロはステパノがなかったならば、考えられなかったと言っても過言ではなかった。

キリストの前に洗礼者ヨハネがそのような殉教的な死を遂げていきました。パウロの前にステパノが逝った。天界において輝く星はこのように下積みとなったところの捨て石です。このステパノのこの殉教の姿。私たちは如何なる運命にあるかどうか、それは知らないけれども、彼はこの一切のパリサイに対して真理を宣べ、またそのパリサイに対して全く無抵抗をもってこれに勝ち、自分が十字架されることによって本当に勝って行った。この姿は私たちの毎日の生活において、この殉教者的な質の在り方をしているときに、本当に十字架を負うのであり、十字架を負うとは、

「汝、常に十字架を負え」

と、負っている十字架の下にて倒れつつ行くという始末です。負っている十字架の下で倒れつつゆくところに本当に十字架を負っている。このようなわけで、それは決して倒れない。それはもっと素晴らしい生命をもってつき進んで行く。

皆さん、この福音の世界は、ものすごい素晴らしい世界ですから、水を割ってはダメですよ。水を割って聖書を適当に近代的に読んでおこうという人は、どうか私の集会は御免こうむります。私は皆さんを、水を割らないところのクリスチャンにしたい。

クリスチャンとはキリスト者、キリスト者とは「油そそがれたる者」という意味です。「油」とは聖霊の油です。この聖霊の油をそそがれたる者をクリスチャンと言う。一体、クリスチャンが幾人、聖霊の油そそがれたる者として自覚しているか。外国からいろいろの宣教師が来て、どうのこうのと言っていますが、大丈夫でございます。私たちは大和魂、日本の武人の後裔です。あの赤穂義士のような素晴らしい義人をだした日本人ではないですか。あの赤穂義士の精神には誰だって打たれるでしょう。それならば、本当に私たちの中に聖霊において死を乗り越えているような義士、聖霊の義士というものが、このクリスチャンであるわけです。であるならば、何と言い逆らいを受けても、神様の御霊の生命、光の中に来たならば、どんなに言い逆らいを受けてもこれを包摂してしまって、全部それを救い上げて行くような、そういう驚くべき担いの愛というものはその人たちの中にある。

●魂は肉体を支配

魂の世界は肉体を完全に支配して行きますよ。これは少し余談になりますが、私の所にこの夏、小諸の集会に来た土岐の一人の青年が居りまして、何だか知らないけれども、丹毒か破傷風か知らないけれども、非常に恐ろしいものにかかってしまった。２、３日のうちに死ぬかも知れないという事態ですよ。その時に彼はいきなり医者に行かなかった。医者に行って悪くないですよ。薬をいただいて結構です。ですけれど、彼は「祈れ」という御言を聞いた。彼はとうとう3時間、もう体裁もへったくれもない。彼は神様にお願いした。

それは御言に基づいた祈りです。

「**エホバが汝の凡ての不義をゆるし、汝の凡ての病を治す**」

という詩篇103篇の言。これは実は、私が小諸において集会の第一回〔1957/8/9、夏期特集第一回集会「絶対恩寵」〕にやったところなので、この青年には感銘が深かったのですが、それを祈った。正直、水を割らずに、その通りに七度叫んで祈った。そうしたら、その３時間の苦闘のあげくに彼は何かサタン的な力を感じたから、彼は

「**サタンよ、退け！**」

と言って、キリストの名によってサタンの攻撃を退かせしめた。祈り終ったら、その病は治ってしまった。彼は本当に泣いて感謝した。彼はただ癒されたことだけではない。罪を神様の前に――罪といっても何も罪ではない。お湯屋でちょっと怪我をしたにすぎない――彼は自分の存在を、彼の普通の在り方を神様の前に悔改めをして行った。本当に勝利したからこれを証した。そこのクリスチャンのドクターが非常に喜んで、本当に素晴らしかった。よく話のわかるドクターでした。キリスト万才の証言が具体的に来ましたので話をしました。

皆さん、そういうわけでありまして、問題は所謂神癒とか何とかいうことを私は言っているのではない。イエス・キリストの生命を受けるということは、その人をどんなに素晴らしくその人とするか。神の栄光体としてその存在をもって、神の栄光として神を讃えていくところのクリスチャンになるかということ。そういった御利益をただ有り難がったのではダメです。また反対に

「その現象は危ないから」

といって、観念になったらどうにもならない。神様の世界はこの聖書が証をしているように、

「**我は霊なり、生命なり**」

というこの聖霊を、ステパノは驚くべき勝利をもって捨て身の証をして行った。

皆さんは一人ひとりがかけがえのない生涯ですよ。どうか、このキリストを無限に受けとってください。そうしたなら、受けとることのいよいよ深ければ深いほど、素晴らしくされて行く。

「これでいい」

なんていうことは絶対にないのですから。しかも、常に満たされつつ進んで行くのですから、これはありがたい話なんです。どうか、この聖書はこの角度から読んで御覧ください。そしたら、聖書の文字が躍動してくるからね。私は決して皆さんに強いはしません。御自由です。私は、これ悔いなし、この世界に限りなく行こうとするだけですから。どう思われても一向さしつかえないです。